

紅い花

(三) 魂の行き先

琉 紅

(三) 魂の行き先

た。

久高島から海を隔てた本島。その遙か北には、海賊からの侵略を阻止し警備する城があつた。

城が北方の海に向かい、そこからの攻撃を前提に作られてゐる。琉球には珍しく、戦のノウハウが含まれて、構築された城だ。その城壁は厚くて高い。

城の後ろは断崖絶壁となり、遠くまで高い山々が連なつてゐる。自然の利を生かした難攻不落の城であつた。

最上部、本丸の屋敷に朝日が差し込んでくる部屋があつた。若者に抱かれ、まさに今、息を引き取つた女性の姿があつた。

彼は冷静を保つてゐるが、嘆く心を押さえてゐるのか震えが止まらない。

「真鶴よ、何故、私を残して御世の世界に行くのか。併に生きると……誓つたではないか……」

と、声にならない。

真鶴の母親は、彼女の頬を優しく撫でる。

「心労が耐えられなかつたのね。純粹過ぎて、ここでは苦しめたね」

城は戦いの場であり、そこの住人には平和は存在しなかつ

他界する一人の女性の苦悩を、優しく受け止めてくれる雰囲気さえ無かつた。母の愛情ある言葉でさえ、城の運命には逆らえない。

老女が強い口調で、

「生きる為に戦い続ける。世は地獄じや。あの世がまだ良いへ行くのか」

自分の髪に手を入れ、武士であることを捨て去るかのようにかき乱した。

そして、北の空を見上げる。自らの魂をその方向へ飛翔させるかのようだ。

側で、真鶴の母が云う。

「その方角には、真鶴はいません」

「え？」

老婆は、これまでになく声を露わに、

「そうじや、魂は、御代に行く前に、一度立ち寄る場所がある」

「立ち寄る？」

老婆は、海を向く城の背、山々、その遠くの空を指刺して、「遠く、南の久高島、あそこから御世イライカナイの世界ワカナへと去っていくのだ。真鶴は今、そこにあるであろう」

若者の目は、飛ぶ鳥を探す様に漂う。

老婆は続けた。

「神人かみんぢやらがいる島じや。命の尊さ、尊厳を守る人々がいる」

「真鶴よ、今からそこへ行くぞ。待つておれ」

若者は立ち上がり、周りの者たちは慌てた。

その様子をじっと眺めていた初老の男が動き出した。

「久高島は、中山の島だ。何かが起きるかもしねれない。これを持つて行くがよい」

と、長く黒い鞘に収まつた刀を手渡した。

部屋で日頃、よく見かける太刀ではあった。

しかし、実際の手に持つた重さは、若者の予想以上だったのだろうか、両手へ持ち直した。

鞘を外すと、刃は傷一つなく鋭く研がれ、光を反射するのではなく、吸収し黒く染まつていた。

多くの修羅場を切り抜けてきたのだろう。

柄は多彩な模様の糸で編まれ、見方、おそらく使う状況で七変化するのだ。

はつきりと何色かは言葉では表せない。